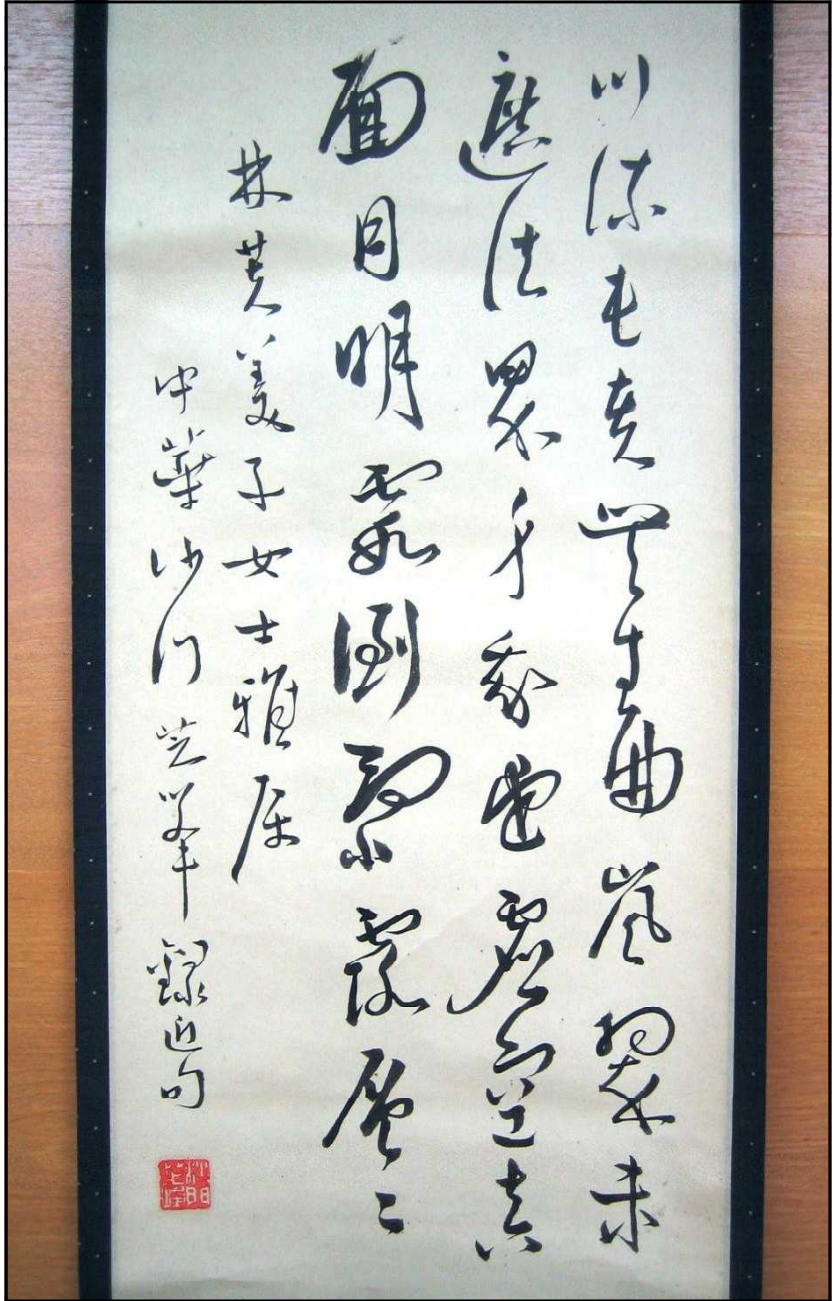


林芙美子蔵釋芝峰七言絶句について

久保卓哉

林芙美子が中国の僧、釋芝峰から贈られた七言絶句の詩は、現在では新宿歴史博物館に蔵されている。だが草書体の筆跡が難解であるため詩の解釈もままならず、全容は明らかにされていなかった。本稿はその全容を明らかにし、あわせて林芙美子と釋芝峰の関係が、内山書店と魯迅にも及ぶことを明らかにするものである。

「キーワード」 魯迅 内山書店 林芙美子 釋芝峰 宇治川 嵐翠 七言絶句



釋芝峰七言絕句

現新宿歴史博物館蔵

『新宿歴史博物館所蔵資料目録2 林芙美子資料目録 2004』（平成十六年三月発行）には、D美術品 D 31 掛軸「宇治川」七言絶句 釋芝峰 480×230 額:1270×250 と記されている。

はじめに

林芙美子が釋芝峰から贈られた七言絶句は、掛物に表装されて新宿歴史博物館に蔵されている。この書幅と出会ったそもそものきっかけは林福江氏にあり、また周国偉氏にあった。

『魯迅与日本友人』（周国偉著、上海書店出版社、二〇〇六年刊）の「魯迅と林芙美子」の章に次のように書かれている。魯迅が林芙美子に贈った錢起の歸雁詩については、これまで言及した人がいないし、上海人民美術出版社の『魯迅詩稿』にも輯録されていない。一九三七年に改造社が出した『大魯迅全集』の口絵に登場するのが最初で、その後の行方が分からない。あるいは家族が保管しているのかも知れないが、日本の研究者はその所在を確かめて貴重な遺産を守ってほしい、と。

触発された私は東京の林芙美子記念館に行けば手がかりが得られると考え二〇〇七年六月十八日に記念館を訪ねた。その時に奇しくも林芙美子の姪にあたる林福江氏とお会いし、来館の目的である魯迅の書の行方を訊ねたところ、言下に、いまは新宿歴史博物館にあります、とおっしゃる。探しあぐねた上での情報であったゆえ聞いた時は閃光と雷鳴に打たれたように衝撃が走った。私は小躍りしたが、ご本人はさらりとおっしゃる。林家にあるのは当然で大騒ぎするようなことはありませんと平然としておられた。魯迅の書は日本に持ち帰られて以来、ずっと林芙美子によって大事に保管されていたわけである。

日を改めて七月二十二日に新宿歴史博物館を訪れたところ、新宿歴史博物館には魯迅の書その他に、林芙美子資料として周作人の偈頌の書幅と釋芝峰の書幅があった。いずれも林芙美子が周作人と釋芝峰から贈られもので、研究員の金森祐子氏によると釋芝峰の詩はまだ解説されていないが、厚紙の外箱に「釈芝峰 宇治川七言絶句 林蔵」のラベルが貼られていることから詩は宇治川を詠んだものであろうとのことであった。

本稿はいまだ解説されていない釋芝峰の七言絶句について、これまでの調査で明らかになったことを報告するものである。

一 釋芝峰の七言絶句

【訓】

川流長奏無生曲

せんりゆうとこしえ
川流 長に奏す 無生の曲

嵐翠未遮法界升

らんすいまいまさ
嵐翠未だ遮らず 法界に升るを

我盡虚空真面目

わはつく
我は盡す 虚空の真面目

明霞倒繫露層層

めいかさかしま
明霞 倒に繫かりて 露層層

林芙美子女士雅属

がしよく
林芙美子女士の雅属によりて

中華沙門芝峯録近句

しやもん しほう
中華の沙門 芝峯 近句を録す



【落款印】

沙門芝峰

【平仄】

- ○ ○ ○ ○ ○ ● 句末字「曲」― 入声「沃」韻
- ● ● ○ ● ○ ○ 句末字「升」― 下平声「蒸」韻
- ● ○ ○ ○ ○ ● 句末字「目」― 入声「屋」韻
- ○ ● ● ○ ○ ○ 句末字「層」― 下平声「蒸」韻

「二四不同」「二六対」の原則に従っている

「孤平」「下三平」の病を避けている

「対」「粘」の原則に従っている

【訳】

宇治川は流れに流れて 不生不滅の曲を奏で
 緑したたる山は 法界に昇る我が身をさえぎらずに迎えてくれる
 虚空の上から この世の真面目しんめんちくを見渡すと
 幾重にも降りた露に朝焼雲が映り あたかも地上にさかさまに吊
 り下げられたように見える

【語注】

無生 天地万物は不生不滅であること。仏教語。

嵐翠 みどり色の山気。みどりいろの山に立つ霧。

法界 因果律に支配される宇宙。仏門、仏教信者の社会。

虚空 何もない空間。大空。物の実体から離れた境地。

真面目 本来の価値。その物の本来の姿。

倒懸 「倒懸」に同じ。さかさまにかかる。逆さにつるす。

明霞 朝方山に帯状にかかって雲のように見えるもの。朝焼けの

かすみ。

層層 幾重にも重なるさま。

【難解文字の判読】

釋芝峰の書は流麗であるがゆえに判読が難しく、文字の特定から始めなければならなかった。字形で判断できない文字は、前後の意味と韻律の原則から考えることが必要であった。文字の特定に至った経緯は次の通り。

起句四字めは「直」に見えるが、直ではなく「奏」。下の「無生曲」と意味の上でも整合する。

承句七字めは「身」に見えるが、身ではなく「升」。「身」の韻目は上平声十一「真」であり、結句七字めの「層」の韻目である下平声十「蒸」と、句末の押韻が成立しない。「升」であれば「升」の韻目は下平声十「蒸」であり、結句の「層」と押韻が成立する。

結句四字めは「懸」に見え、且つ「倒懸」と熟した語は一般的であるが、漢詩には「二四不同」、二字めと四字めの平仄は同じであってはならない、という原則があり、「懸」であれば「懸」

の韻目は下平声一「先」で、平仄では平声、二字めの「霞」の韻目は下平声六「麻」で、平仄では平声で、どちらも平声になり原則を犯す。更に漢詩には「孤平」は最も避けなければならぬという原則があり、四字めの「懸」(平声)はその前の字「倒」(仄声)とその後の字「露」(仄声)にはさまれて、「孤平」の禁を犯すことになる。従って「懸」ではない。この四字めは「繫」にも見え、「繫」であれば韻目は去声十二「霽」で、平仄では仄声であり、「二四不同」の原則にかなひ、且つ「孤平」を避ける原則を満たす。従って「繫」である。

【鑑賞】

「川流長奏」の「長」には、ずっと向こうまで流れる宇治川の実景がある。と同時に永遠の時間をも表す。下三句の「無生曲」の「無生」とは不生不滅のことである。従って、「遙か昔の過去から永遠の未来に向けて、とこしなえに流水の音が続いている」ということである。

起句と承句は対句をなしている。起句の、滔々と流れる川の瀬音と、承句の、翠^{みどり}滴る山の青さの対照は美しい。本来「山」と「川」は自然界の代表的景観だが、「山」は立体的であり、「川」は平面的である。この二物を対照的に用いて、風景全般を描き出している。また、「川の流れ」を音として捉え、「山のみどり」を色として捉えている。聴覚と視覚とを対照し、且つ、両句共、下三句に「無生曲」と「法界升」の仏教語を対応させている。「未遮法界升」とは、「法界」(山)に昇る我が身をさえぎらないこと

をいう。無生の曲を聴いていると、法界の天上に、昇って行くようになるのである。

転句と結句は、山の上から下界を眺め渡した光景。「空」は仏教語であるが、また大空のことでもある。山の高所から大地を見るのは飛行機の上から下界を眺めるかの如く、地上の世界の「真面目」が残すところなく見渡せるのであろう。時刻的に朝の美しい地上の情景を詠んだのが結句である。

「明霞」は赤く染まった朝焼雲。「層層」は、大地の上の森羅万象が高低さまざまに層をなし、それぞれに残すところなく露が降りているさま。「露層層」は、地面にも露、低木にも露、高木にも露がある。萬物に露が降りている。その露は朝日を受けて反射している。しとどに置く露がキラキラ光っている景観は、恰も天空の明霞を、さかさまに地上に吊り下げたように見える。天空の現象の「明霞」と地上の現象の「露層層」とが対比して歌われている。

「倒繫」は、江戸初期の石川丈山の有名な詩「富士山」に、

仙客来遊雲外巔 仙客来たり遊ぶ 雲外の巔

神龍棲老洞中淵 神龍棲み老ゆ 洞中の淵

雪如紈素煙如柄 雪は紈素の如く 煙は柄の如し

白扇倒懸東海天 白扇倒(さかしま)に懸かる 東海

の天

とある「倒懸」と同類の発想で、石川丈山は大空に聳える富士山を、白扇をさかさまにした形に見たててうたい、釋芝峰は、天空の明霞を、地上にさかさまに吊り下げられたものと見たてている。

宇治の平等院鳳凰堂には天空に飛ぶ雲中供養菩薩像五十二軀がある。釋芝峰は、それを見て詩想を得たのであろう。実際に嵐翠の山に登った彼は、上から見た自然の美しさを、悟りの世界を述べる仏教語を用いてうたったのである。この詩は多分に仏教味をおびて深みがあるが、実は自然の美をうたった叙景詩であるといえよう。



平等院鳳凰堂の雲中供養菩薩像



平等院鳳凰堂の雲中供養菩薩像全貌

平等院発行の『平等院鳳翔館』二〇〇六年初版第四刷の解説に、「雲中供養菩薩像は、阿弥陀如来を供養讃歌して浄土の空を飛翔する菩薩の群像で、鳳凰堂の長押の上、本尊阿弥陀如来坐像を取り囲むように懸けられていた。五十二軀あり、楽器をとる像が二十八軀と過半数を占め、舞う像や、僧形の像もある。

当初は彩色が施され、鳳凰堂内の壮麗な世界を鮮やかに演出していたと思われる」とある。(同書、第五十九頁。写真も同書による)

【評】

林芙美子は偶然にもこの詩の世界観と同じことを記している。昭和二十二年に世界文学社から出版された、『夢一夜』の「あとがき」にいう。

どんな人間にも、一つの生きかたが存在してゐるはずで、平凡な生きかた、波瀾のある生きかた、塵芥のやうなつまらない生きかた、だけど、空の上の神様のやうな広々とした眼で、下界をみおろしたならば、人間一人々々の生活を、どれが立派で、どれがつまらないとは云ひきれないのではないかと思ひます。すべての人のこゝろにはそれぞれの「思ひ」があり、その「思ひ」のみは、再びめぐり来ない現象の中で、再びくりかへすことのない箇々の生活生涯を、誰も彼も自分の環境によつて、雄々しく生きつゞけてゐます。……………昭和二十二年六月三十日夜 下落合にて 林芙美子

『夢一夜』世界文学社、昭和二十二年九月三十日、
「あとがき」

林芙美子は釋芝峰から贈られたこの七言絶句を見て、或いは詩の意味を芝峰から聞いて、さぞかし「まあ・・・」と感嘆し絶句したであろう。自分がどこかで考えたことがある世界観がうたい込

まれていたからである。林芙美子が終生この詩を大事にしていたのには、このような理由があつたからであろう。

二 釋芝峰について

釋芝峰、字は象賢、俗名を石鳴珂といい、浙江省温州の人。生卒年は、一九〇一年〜一九七一年で、林芙美子が一九〇三年〜一九五一年であるから、芙美子より二歳年上である。

芝峰は一九二七年から一九三二年の五年間、厦門の南普陀寺にある閩南仏学院(仏教の高等教育機関)で学僧の教育と院務に当たり、唯識を講じて多くの学僧を育てた。一九三四年、厦門を出て浙江省寧海の延慶寺の都監(禪林の六知事の一。監寺かんすの上にあつて一切の寺務を監督する)を務めて、各地で仏教を講じ、一九三六年には再び厦門に戻つて閩南仏学院の院長となつた。一九三七年に日中戦争が始まると、閩南仏学院は閉院され、芝峰は上海の静安寺に寄居して著述に励み、一九四三年には鎮江、焦山の定慧寺にある焦山仏学院に招かれて講話をする一方、著述と翻訳に従事して、日種謨山(日本)の『禅学講話』を翻訳した。抗日戦争後の一九四六年、芝峰の師、太虚大師が焦山仏学院に中国仏教整理委員会の会務人員訓練班を設立して芝峰を主任に命じ、芝峰は中国仏教の復興を図ることに尽力して、中国仏教会の会則と各種の規則を草案した。

これがその略歴だが、芝峰は生涯を通じて仏法によく通じた教法の師であつた。林芙美子に贈つた詩が「法界」に身をおく自ら

の立場を一歩たりとも踏みはずしていないのと、ぴったりと符合する。

釋芝峰には、日本の井上玄真述『唯識三十論講義』（哲学館大
学、一九〇五年）を翻訳した『唯識三十論講話』（井上玄真著、
芝峰訳、武昌、武昌仏学院、一九三七年）、と、日種讓山著『禪
学講話』を翻訳した『禅学講話』（日種讓山著、芝峰法師訳、台
北市、文津出版社、一九八五年）の訳書があり、日本語に精通し
ていたことが分かるが、日本との接点はどこにあったのだろうか。
その手がかりを与えてくれるのは、李守静が中国仏教協会の月
刊誌『法音』（一九九八年第五期、総第一六五期）に発表した
「近代江蘇僧教育概観」である。

一九四一年から一九四五年の間に、日本の友松園諦、藤井
草萱、岸文貞等の仏教学者が焦山仏学院に来て仏教学を講
じた。学院側からも教師が日本を訪問し、学僧が留学した。
日本を訪問した教師に、芝峰、東初、圓湛がおり、学僧に
智平、仏宗、本滄、夢初等がいる。芝峰法師は日本から
『禅学講話』の書を持ち帰って学僧に講義し、また中国語
に翻訳して焦山仏学院の『中流』誌上に掲載した。

これによると芝峰は焦山仏学院の代表として日本を訪問している。
それが何年のことなのかを記載していないが、日本の仏教学者と
焦山仏学院との交流は一九四一年からで、芝峰が鎮江の焦山仏学
院に移ったのは一九四三年であるから、芝峰が日本に渡ったのは
一九四三年かもしくは一九四四年であろう。その時、何処に立寄
り、誰と会ったのかについては全く不明だが、唯一その事実を伝

え残すのは、現在のところ、林芙美子所蔵のこの七言絶句だけで
ある。詩は、芝峰が京都に入り、宇治平等院を訪れ、宇治川河畔
に立ったことを伝えている。そして「林芙美子女士の雅属により
て、中華沙門芝峯、近句を録す」とあるから、芝峰は何処かで林
芙美子と会っている。

三 林芙美子と釋芝峰

林芙美子と芝峰は何処で会ったのだろうか。林芙美子の年譜を
参照すると、

昭和十七年（一九四二）三十九歳。十月、報道班員として、
南方に派遣され、仏印、シンガポール、ジャワ、ボルネオ
などに八ヶ月滞在、現地人の間で生活した。

昭和十八年（一九四三）四十歳。五月、南方の従軍より帰
国。六月十日より十八日、湯ヶ島に滞在。七月二十八日よ
り三十一日、京都旅行。（『林芙美子全集』第十六卷、「年
譜」、「年譜作成」今川英子、文泉堂出版、一九七七年）

林芙美子は仏印、シンガポール、ジャワ、ボルネオなどの南方の
地を八カ月間回った後、一九四三年五月に東京に戻った。戻った
先は新築間もない下落合の家である。そして夏の七月二十八日よ
り三十一日まで京都に旅行をしている。これらの限られた資料だ
けで軽々に論じてはならないが、芝峰と林芙美子の接点を求める
フォーカスはここに合う。二人は、一九四三年七月二十八日より
三十一日の間に京都で会った可能性がある。

では、なぜ二人は会うことになったのだろうか。芝峰と林芙美子
を結びつけるものは何か。

それは魯迅であろうと考える。

魯迅と内山完造との親交は夙に知られているが、これに林芙美
子が加わり、弘一法師、夏丕尊が加わり、そして芝峰法師が関係
する。

四 林芙美子と魯迅

林芙美子は一九三〇年と一九三二年に二度、上海で魯迅と会って
いる。いずれの時も内山書店の内山完造の紹介で、魯迅は「日
記」に次のように記している。

【一九三〇年九月十九日】晩、内山、隣の家を借りて宴席
を設け、林芙美子をもてなす、私も招かれる、同席者約十
人。

【一九三二年六月十二日】日曜。雨。午前、林芙美子来る。
林芙美子も、魯迅の死（一九三六年十月十九日）の翌年に書いた
「魯迅追憶」の中で次のように記す。

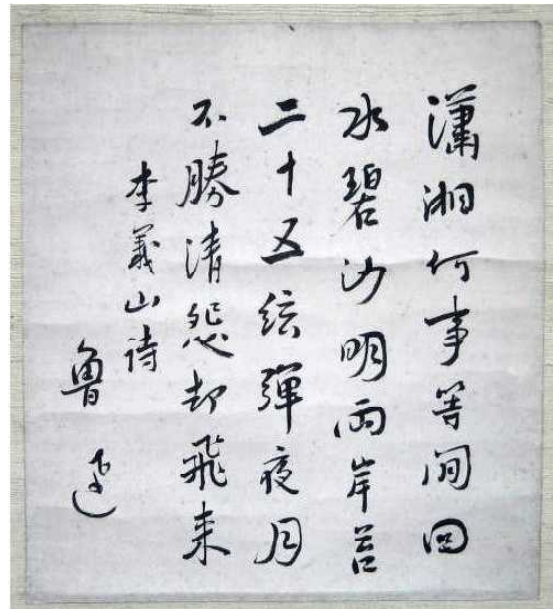
魯迅氏にお目にかゝつたのは昭和五年の秋である。内山
完造氏の御紹介で上海に着いた私の爲に歓迎の宴が張られ
た時、あつまつて下さつた方に、魯迅氏、郁達夫氏、田漢
氏、鄭伯奇氏、白薇さん、こんな方達がゐらつてゐた。
その會が果てる頃、みんなの方が詩を書いて下さつたが、
魯迅氏は私のために唐詩選の中の二十五絃と云ふ詩を書い

て下さり、「阿Q正傳」と云ふ本をられた。聽て私が阿Q
正傳に溺れたのは勿論である。（中略）

昭和七年の六月マルセイユからの歸へり、船が上海に寄
つた時、私は魯迅氏を再びお尋ねした。子供さんや若い
奥さまにも始めてお目にかゝつたが魯迅氏は上海事件の後
のせい非常に疲れたやうな顔をしてゐられた。私が巴里
の話をする時、それをむさぼるやうに訊いてゐられた。（後
略）

（『改造』昭和十二年四月号、一八六頁）

林芙美子という「唐詩選の中の二十五絃と云ふ詩」とは、錢起の
「歸雁」のことで、魯迅のこの書は、林芙美子によつて大事に保
管され、芙美子の死後、遺族によつて新宿歴史博物館に寄贈され
た。左がその書である。



林芙美子藏魯迅墨跡 現新宿歴史博物館藏（撮影、筆者）

この書をめぐっては、唐詩の作者名の異同、魯迅から贈られたのは何年のことか、用紙は何か、一九三七年の『大魯迅全集』（改造社）以降の日本での扱いはどうであったかなど、明らかにすべきことがあるが、それは稿を改めて発表する。

五 魯迅、内山完造と弘一法師、夏丏尊

内山完造と魯迅とが、共に弘一法師、夏丏尊と交流があったことは、内山完造の著『花甲録』（岩波書店、一九六〇年九月二〇日第一刷発行）と、魯迅の「日記」によって明らかである。

内山完造は、弘一法師が福州の鼓山湧泉寺で発見した古版本によって再版した、華嚴経論疏纂要四十八巻の全二十五部のうち十五部の書を、上海の内山書店から日本へ送ったことを記し、『花甲録』大正庚申九年（1920）の項）、李叔同即ち後の弘一法師が浙江省温陵の晚晴山房で遷化したこと、その弘一法師を紹介してくれたのは夏丏尊であったことを記し（同上書「小晚餐会」、また、

書店の経営に成功するとともに多くの知己友人が日本と中国の間に出来た。しかもその友人が實際革命者に多い。李人傑、白兪桓は何れも毒刃に倒れた人である。後には瞿秋白である。柔石、白莽も同じく犠牲者である。朱鐘我もそうだ。王独清もと数え上げると多いが、今とくに挙げなければならぬ人は中国の初代の社会主義者中の李大釗、陳独秀も書店のお客様であった。弘一法師も夏丏尊も郁達夫もということになる。しかしもともと私が親しくした人は今中国五億六千万人の聖人として仰がれる魯迅先生との親しさである。お忘れておった。異彩先生、陳羣先生、そして魯迅先生につながることで、私は今日も中国到着処で中国の友人であるとか、中国人の老朋友であるとか、言うて知己がある。

（同上書「北京にて（二月二十日）帰国代表訪中記）」

と、魯迅とともに弘一法師、夏丏尊も書店の客であったことを記している。特に夏丏尊は、内山完造の妻、内山みきが上海で亡くなった時（一九四五年）、墓に「内山書店創立者 内山美喜子之墓 以書肆為津梁 期文化之交互 生為中華友 歿作華中土 吁

嗟乎 如此夫婦」との碑文を書いている。

魯迅の「日記」には、魯迅が内山完造に頼んで弘一法師の書を手に入れたことが、次のように記されている。

(一九三二年) 三月一日。午後内山書店に行き、内山夫人に曹白魚の油漬けを贈り、内山君から弘一上人の書を譲り受ける。

そして夏丐尊のことは魯迅の日記に、

(一九二六年) 八月三十日。夜、劉大白、夏丐尊、陳望道、章雪村、家に来る、話す。

(一九二七年) 十月五日。章錫琛、夏丐尊、趙景深、張梓生来訪するも、遇えず。

(一九二七年) 十月十二日。章錫琛を訪ね、趙景深、夏丐尊に会う。内山書店に行き本を六冊買う、全部で十五元。

(同年) 十月三十日。午前、夏丐尊から手紙が届く。

(同年) 十一月六日。午前、夏丐尊がやって来て、華興楼で行う暨南大学の「同級会」での講演と昼食を招請される。等々のように登場する(他例省略)。

これらの事実は、内山書店と魯迅とが、弘一法師と夏丐尊たちと親しく交流していたことを示す。しかもその共通項は「日本留学」であった。魯迅(一八八〇―一九三六年)の留学は一九〇二年三月で、弘文学院で二年間学んだ後、仙台医学専門学校に進んだことはよく知られている。仙台を一九〇六年三月に退学して東京に戻り、一九〇九年八月に帰国するまで、魯迅は都合七年間日本で活動した。弘一法師(本名、李叔同。一八八〇―一九四二

年)は、一九〇五年八月に来日して、翌年九月上野美術専門学校に入学し、美術、音楽、演劇などを学び、一九一一年に帰国している。夏丐尊(一八八六―一九四六年)は、一九〇五年に来日して魯迅と同じ弘文学院で学んだ後、東京高等興業学校に入学し、一九〇七年に帰国している。弘一法師と夏丐尊が日本に留学した時、東京には魯迅がいたのである。また後の一九二六年に上海で創業された開明書店で編集にたずさわった夏丐尊は、魯迅との共訳で『芥川龍之介全集』を出版している(一九二七年、開明書店刊)。

六 夏丐尊と釋芝峰

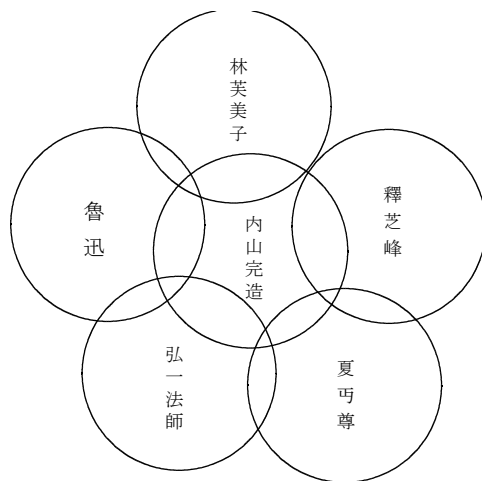
内山完造は「私の挨拶」(一九五九年八月八日、『花甲録』収)の中で、妻の墓に刻まれた夏丐尊の碑文について、「これはかつて開明書店の総編輯であり『南伝大藏経』翻訳主任であった、今は已に故人となった夏丐尊先生が書いて下さったものであつて・・・」と記している。ここに記された『南伝大藏経』とは、高楠順次郎(一八六六―一九四五年)が監修したパーリ語仏典の日本語訳で、一九三五年から一九四一年の間に大蔵出版から全六十五巻、七十冊が刊行された。この『南伝大藏経』を更に夏丐尊等が漢語に訳そうとしたことをいう。その翻訳に当たったのが、夏丐尊と芝峰法師、范古農等であった。

七 再び林芙美子と釋芝峰

以上のことから林芙美子と釋芝峰は内山完造を介して接点を持ったことが考えられる。そしてその背景には内山書店を媒介の母体としてつながる魯迅と弘一法師と夏丕尊がいたのであった。

釋芝峰が日本に来たのは一九四三年で、この年の夏の七月二十八日から三十一日の間に、林芙美子と京都で会った可能性がある。と前述したが、それは内山完造からの連絡を受けて林芙美子が釋芝峰の来日を知っていたからであろうと思われる。(その手段は手紙によることが考えられるが、新宿歴史博物館蔵の林芙美子宛書簡の中に内山完造からのものはない)

この時釋芝峰は芙美子の求めに応じて詩を作ったのだが、詩の中の「明霞」は朝霞のことで、朝霞は春の現象である。芝峰は春の宇治川河畔に立ちその景観の美しさを見ていた。したがって芝峰は、一九四三年の春には京都に来ていたと考えられる。



内山完造を中心とする交流図

八 萬福寺と南禅寺

明の僧隠元によって開山された宇治の萬福寺は、江戸中期まで代々中国僧が住持を務めていた。したがって釋芝峰が萬福寺に滞在した可能性が高い。その資料の有無を萬福寺に問い合わせたところ、萬福寺文華殿の黄檗文化研究所からの回答として、その記録は残されていないことが判明した。(萬福寺御坊前田氏のご尽力による)

また讀賣新聞昭和二年四月二日朝刊の記事に「一山國師の碑支那僧の發願で南禅寺に」の見出しで「太虚法師ら支那佛教界代表者の發願により、南禅寺一山國師の墓所へ國師の記念碑を建立することとなったが、すでに當局の許可も得、碑は六月までに竣工を告ぐる豫定である。碑文は太虚法師の撰にかかり、工費は千五百圓。別に國師の語録及び傳記を編纂する筈で、豫算約四千圓を計上されている。」とある。釋芝峰の師である太虚法師が一九二七年に南禅寺を訪れ、鎌倉時代に中国から渡来して南禅寺で病没した一山國師の記念碑を建立することを報じたものである。とすれば太虚法師の高弟である釋芝峰が師の跡を追って南禅寺を訪れた可能性がある。南禅寺に、太虚法師撰の碑文の有無と釋芝峰訪問の記録の有無を問い合わせたところ、南禅院に一山國師の碑と頂相彫刻である一山一寧坐像(重要文化財)はあるが、釋芝峰の足跡を記す資料はないことが判明した。(南禅寺派宗務本所法務部長直山明德氏のご尽力による)

萬福寺と南禅寺に釋芝峰の足跡が見つからず、当時の新聞や他

の文献資料にも釋芝峰の記録がないということは、却ってこの釋芝峰の書幅の価値を高める。唯一その足跡を伝え残すのは、林芙美子によって蔵されてきたこの七言絶句だけだからである。

あとがき

釋芝峰の書の為書には「林芙美子女士の雅属によりて、中華沙門芝峰近句を録す」とあるからこの詩は林芙美子の求めに応じて作られたものである。いわば即興の詩であるが、川と山の自然の美を描きながら、構想は空間的宗教的で精神性に富み、仏徒としての人生觀まで織り込んでいる。その詩趣は玄遠なまでに深い。かくも味わい深い詩であることを教え示して解説に導いてくれたのは師の古田敬一先生(広島大学名誉教授)であった。師からは十通に及ぶ書簡をいただいたが、そのつど文字の特定と詩意の解釈とその根拠が示されていた。第一章の【訓】、【平仄】、【訳】、【難解文字の判読】、【鑑賞】はほぼすべて師の教えによるものである。「古の学ぶ者は必ず師有り。師は道を伝え、業を授け、惑いを解く所以なり」という韓愈のことばを身をもって体験した。また狩野充徳氏(広島大学教授)からも文字の特定と詩語の解釈について明確な指摘をいただいた。加うるに筆者が所属する広島明清小説研究会の研究員諸氏からも貴重な意見をいただいた。また林芙美子の姪にあたる林福江氏からは、遺品である釋芝峰の書について調べるきっかけを与えられ、新宿歴史博物館の金森祐子氏からは調査の便宜と研究の動機とを与えられた。また上述

のように萬福寺の前田氏と南禅寺の直山明德氏からは懇切丁寧な回答をいただいた。特に南禅寺では南禅院一角にある一山国師碑の写真撮影が許可され、碑は一基ではなく二基あることを初めて知った。この二基の碑文の解説は今後の課題となる。かように拙論は多くの人に支えられた。ここに記して心から感謝の意を表したい。

(本稿は、福山大学社会連携研究推進事業による研究成果の一部である)

On a Calligraphy of *Shí Zhí Feng*'s Chinese seven character quatrain possessed by *Fumíko Hayashí*

KUBO Takuya

In this article I annotate a Chinese poem on "*Uji-gawa* 宇治川" by *Shí Zhí Feng* 釋芝峰 which is not-yet-understood, belongs in the Shinjuku Historical Museum 新宿歴史博物館 where possess many relics of *HAYASHI Fumiko* 林芙美子, and also clarify the relationship between *HAYASHI Fumik* and *Shí Zhí Feng*.

Keywords: Chinese seven character quatrain, Fumiko Hayashi, Lu Xun, Kanzo Uchiyama, Shi Zhi Feng